

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：13701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26780378

研究課題名(和文)抑うつ軽減を意図した子どもから親へのサポートプログラムの開発

研究課題名(英文)Development of a support program for depression provided by children to parents

研究代表者

板倉 憲政 (Itakura, Norimasa)

岐阜大学・教育学部・助教

研究者番号：20708383

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、青年の視点から親子間におけるソーシャル・サポート(以下：SS)の互恵性が大学生の独立意識と抑うつに及ぼす影響について調査を行った。その結果、親から青年へのSSと青年から親へのSSがどちらも高い群では、どちらも低い群よりも有意に独立性の得点が高いことが明らかにされた。さらに、重回帰分析の結果から、父親から青年へのSSは、青年の抑うつ得点と負の関連を持っていることが示された。その一方、男性において、青年から母親へのSSは、青年の抑うつ得点と正の関連を持っていることが示された。また、女性において、母親から青年へのSSは親への依存と正の関連を持っていた。

研究成果の概要(英文)：The effects of social support reciprocity between parents and adolescents on independency and depression were investigated. The results indicated that independency were higher in the HH group, in which both SS scores from parents to adolescents and from adolescents to parents were high, compared to the LL group, in which both SS scores were low. The results of multiple regression analysis indicated social support from adolescents to fathers had negative correlations, whereas, in men, social support from adolescents to mothers had positive correlations with depression scores. Moreover, in women, social support from mothers to adolescents had positive correlations with dependency on parents. The results suggest that the support model including not only support from parents to adolescents, but also support from adolescents to parents might be useful for the understanding adolescents with depression in adolescents.

研究分野：臨床心理学

キーワード：親子 ソーシャル・サポートの互恵性 抑うつ 独立性

1. 研究開始当初の背景

近年、ニートや引きこもりなど、自立を先延ばしにする青年の存在が目立ち始めている。その背景として、自立を先延ばしにする青年は、経済的自立がなされていないのみならず、精神的な支えとして両親の援助に頼りきり、精神的な自立も達成されていない状態であることが推察される。

青年期の親子関係の発達の側面について説明する概念として心理的離乳 (psychological weaning) が挙げられる。心理的離乳とは12歳~20歳の青年には家族の監督から離れ、自立に向けて一人の独立した人間になるうとする衝動が現れることを示す(Holingsworth,1928)。落合(1996)は「対等な親子関係」が心理的離乳を遂げた段階であると指摘している。また、Usami et al (2011)は、Family Relationship History Graph(FRHG)を用いた累積的家族研究によると、青年期以降に子どもが家族内で勢力を獲得するといった特徴を明らかにしている。さらに、つまり、青年期においては対等な親子関係を構築していくことが青年の独立性や精神的健康を考えていく上で重要な要因になると考えられる。

また、家族システム論に基づくと、親から子どもへの影響だけ子どもから親への影響も過程している。しかし、親子研究の多くは、両親が子どもを支援するという枠組みで研究が実施されている。そのため、子どもが両親に与える影響や、子どもから両親を支援するという枠組みでの研究が行われていないという問題が存在する(e.g., Cummings, Davies, & Campbell, 2002)。実際、子どものストレス度が高い場合、家族からの情緒的サポートは子どもの疾患リスクを高めてしまうことが明らかにされている(e.g., Jones & Moore,1990)。

このことから青年がネガティブな状態に陥った場合に、家族が疾患リスクを持った弱い存在として青年を見なして過度にサポートするため、青年の独立性を低下させ、さらには青年のネガティブ気分を維持させてしまうという悪循環が存在する可能性がある。従って、親から青年へのサポートではなく、青年から親をサポートすることを通して、青年の独立性が高まることで、ネガティブ気分状態の改善に繋がるということが考えられる(図1参照)。

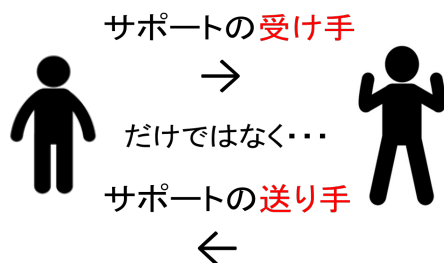


図1. 親子間のソーシャル・サポートの互恵性

2. 研究の目的

本研究では、青年の視点から「対等な親子関係」と考えられる親子間のソーシャル・サポートの互恵性と独立性や抑うつとの関連を検討する。落合(1996)によると青年期後期、すなわち大学生の親子関係は親が青年を支援していた関係から、親から信頼・承認される関係へと移行していき「対等な親子関係」へと発達的变化を遂げると述べている。つまり、青年が親からソーシャル・サポートを提供されながらも、自らが親に対してソーシャル・サポートを提供する互恵状態が「対等な親子関係」と同等であり、そのような互恵状態が子どもの独立意識を高めることが考えられる。一方で、両親の過剰なソーシャル・サポートは独立性の発達を脅かし依存的にさせてしまう可能性がある。実際、自立的な青年は、依存的な青年よりも、両親により多くのサポートを提供することが明らかにされている(Lang & Schütze, 2010)。また、ソーシャル・サポートが互恵状態であっても「入手と提供が共に少ない」場合、精神的健康が阻害されるという(片受・庄司, 2000)という知見もあることから、高い互恵状態であることが独立意識を高めることや抑うつ感を下げていく上で重要であると考えられる。以上のような背景から、本研究では以下の4つの研究を実施した。

研究1: 高校生を対象にした親子間におけるSSの互恵性の検討

研究1では、高校生を対象に親から子どもへのソーシャル・サポート(以下SS)と子どもから親へのSSの授受に着目し、自己決定理論(Deci & Ryan, 2000)における三つの心理的欲求、(1)自律性への欲求、(2)コンピテンスへの欲求、(3)関係性への欲求との関連について質問紙調査を実施した。

研究2: 大学生を対象にした親子間におけるSSの互恵性の検討

研究2では、青年の視点から親子間におけるSSの互恵性が大学生の独立意識と抑うつに及ぼす影響について質問紙調査を行った。

研究3: 親の勢力を踏まえた親子間におけるSSの互恵性に関する検討

研究3では、親子間におけるSSの互恵状態でも、大学生の親の勢力認知によって青年の独立性と抑うつに及ぼす影響は異なると予想される。このことから、青年の認知する親の社会的勢力を踏まえて親子間SSの互恵性と青年の独立性、抑うつとの関連を質問紙調査によって検討した。

研究4: 臨床群と健常群との比較を通じた親子間におけるSSの互恵性の検討

研究4では、親子間におけるSSの互恵性と心理的well-beingとの関連性を健常群と気分障害などの診断を受けている臨床群と

の比較を踏まえて質問紙調査によって検討した。

3. 研究の方法

研究 : 調査対象は、高校生 250 名(男子 125 名, 女子 125 名)を対象に質問紙調査を実施した。平均年齢は 16.78 歳 (SD=.91)であり, 高校 1 年生が 89 名, 高校 2 年生が 80 名, 高校 3 年生が 81 名であった。質問紙の構成としては, 親子間の SS 尺度を作成するために, 後藤(1991)の SS 尺度, 久保ら(2001)の学生用 SS 尺度, 嶋(1991)が用いた大学生用の SS 尺度を参考に「父親から子どもへの SS」, 「母親から子どもへの SS」, 「子どもから父親への SS」, 「子どもから母親への SS」の四つを作成した。また, 心理的欲求を測定するために, 1)自律性への欲求, (2)コンピテンスへの欲求, (3)関係性への欲求の三因子構造になっている心理的欲求尺度(大久保・加藤, 2005)を用いた。

研究 : 調査対象は, 大学生の男子 104 名, 女子 118 名(平均年齢 20.9 歳, SD=0.74)であった。質問紙の構成としては, 嶋(1991)が用いた大学生用の SS 尺度を参考に「父親から子どもへの SS」, 「母親から子どもへの SS」, 「子どもから父親への SS」, 「子どもから母親への SS」の四つを作成した。独立意識尺度は加藤・高木(1980)の作成した尺度を用いた。抑うつを測定する尺度としては Self-Rating Depression Scale(SDS)の日本語版(福田・小林, 1973)を使用した。

研究 : 調査対象は, 大学生の男子 88 名, 女子 136 名(平均年齢は 19.89 歳, SD=1.07)であった。質問紙の構成としては, 研究のものから一部改良した「父親から子どもへの SS」, 「母親から子どもへの SS」, 「子どもから父親への SS」, 「子どもから母親への SS」の四つを用いた。親の社会的勢力は板倉(2012)の「参照-専門勢力」と「賞-罰勢力」の 2 因子を仮定した尺度を用い, 父親・母親の社会的勢力を評定した。また, 独立性は加藤・高木(1980)の作成した独立意識尺度の下位因子である「独立性」項目を用いた。抑うつは福田・小林(1973)の SDS 日本語版尺度を用いた。

研究 : 調査対象は, 臨床群 103 名(男性 54 名, 女性 49 名, 平均年齢は 22.79 歳, SD=3.36), 健常群女子 171 名(男性 85 名, 女性 86 名, 平均年齢は 23.27 歳, SD=3.63)であった。質問紙の構成としては, 研究で用いた「父親から子どもへの SS」, 「母親から子どもへの SS」, 「子どもから父親への SS」, 「子どもから母親への SS」の四つを用いた。心理的 well-being は, Ryff(1989)の Psychological Well-being Scale を基にして作成された心理的 well-being 尺度(西田, 2000)に含まれる 1)人格的成長 2)人生における目的,

3)自律性, 4)積極的な他者関係の 4 下位尺度を用いた。

4. 研究成果

研究 の成果

研究 では, 分散分析の結果, 親から子どもへの SS 得点と子どもから親への SS 得点がどちらも高い群である HH 群が共に低い LL 群よりも関係性への欲求, 自律性への欲求, コンピテンスの欲求が高いことが明らかにされた。LH 群よりも HH 群の方が関係性への欲求, コンピテンスの欲求が高いことが示された。重回帰分析の結果, 主として親から子どもへの SS と心理的欲求との間に正の関連が示された。しかしながら, 子どもから母親への SS と自律性とコンピテンスへの欲求との間に正の関連が見られた。本研究の結果から, 高校生の時期では「親から子のへ SS」が子どもの心理欲求を高めていく上では重要になる可能性が示唆された。この結果は, 高校生の時期では, 学校生活, 部活, 進路や入試などにおいて親から子どもへの SS の方が多くなっていることが関係していると考えられる。従って, 高校生の時期では親子関係における対等な SS になっているとは言いがたいことが推察できる。しかし, 自律性やコンピテンスへの欲求においては, 「子どもから母親への SS」によっても高まる可能性が示唆された。

研究 の結果

研究 では, 親から青年への SS と青年から親への SS がどちらも高い HH 群では, どちらも低い LL 群よりも有意に独立性の得点が高いことが明らかにされた。さらに, 重回帰分析の結果から, 父親から青年への SS は, 子どもの抑うつ得点と負の関連を持っていることが示された。その一方, 男性において, 青年から母親への SS は, 青年の抑うつ得点と正の関連を持っていることが示された。また, 女性において, 母親から子どもへの SS は親への依存と正の関連を持っていた。全体的に青年から父親への SS が子どもの独立性と正の関連を示しており, 父子関係が子どもの独立意識に関連があることが示唆された。しかし, 青年が親を権威的存在と認知した状況で, 親が一方的にサポートする場合は, 過剰利得状態に陥っており, 青年の独立意識を下げ, 親への依存性を高める可能性がある。一方, 大学生が親を権威的存在と認知した状況で, 子どもが一方的にサポートする場合は, 子どもに負担感および要求不満感を引き起こし, 抑うつが高くなる可能性がある。

研究 では, 親子間の SS の互恵性だけでなく, 親子間の勢力関係の均衡性についての要因も踏まえながら検討していく。

研究 の結果

研究 では, 階層的重回帰分析の結果から, 親子間での SS が互恵状態でも大学生が親の

勢力を参照 - 専門勢力として認知している場合に、独立性が高いことが示された。また、賞 - 罰勢力よりも参照 - 専門勢力の親を持つ大学生の方が、抑うつ得点が低かった。このことから、賞 - 罰勢力といった外発的な動機に基づいたサポート関係ではなく、大学生が親の参照 - 専門勢力を認知し、内発的な動機に基づくサポート関係が大学生の独立性や抑うつには影響を及ぼすことが示唆された。

研究の結果

臨床群と健常群は共通して、親から青年への SS と青年から親への SS がどちらも高い HH 群では、どちらも低い LL 群よりも有意に心理的 well-being 尺度の人格的成長、人生における目的、環境制御力、自己受容、積極的な他者関係が高いことが明らかにされた。

臨床群は、健常群と比較して、父親から青年へのサポートが有意に少なく、青年から母親へのサポートが有意に多いことが示された。さらに、 χ^2 二乗検定の結果、健常群は、有意に HL 群が多く、LH 群が少ないことが明らかにされた。一方、臨床群は、有意に HL 群が少なく、LH 群が多いことが明らかにされた。このことから、健常群では、受け取った SS の方が提供した SS よりも多い状態を示す過剰利得によって精神的健康度を高めている可能性が推察された。

臨床群では、親からのサポートが乏しく、提供した SS の方が受け取った SS よりも多い状態を示す過小利得が多く見受けられたが、この状態は、サポート提供者に負担感および要求不満感を引き起こす。それ故、臨床群では、抑うつが維持される可能性が推察された。しかし、健常群では、青年から親へのサポートが少ないことから自律性が阻害される可能性についても考えていく必要がある。

本研究の意義

本研究ではこれまでの親子研究の反省点の一つである子どもから親への影響に関する研究が乏しいという問題 (Cummings, Davies, & Campbell, 2006) を踏まえ、親から青年へのサポートだけでなく、青年から親へのサポートを通して、青年の独立意識を高め、抑うつを低減していける可能性が示した点で意義深い知見を提示したといえる。

今後は、青年から親への SS と親から青年への SS の互惠性を踏まえた介入プログラムの構築を行う必要があり、臨床群を対象に介入プログラムの検証を行っていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1) Itakura, N. & Koide, G. (2016). The effects of social support reciprocity between parents and adolescents on independency

and depression of undergraduate students *International Journal of Brief Therapy and Family Science* Vol. 5, No.2, 62-72. 査読有

〔学会発表〕(計 3 件)

1) 小出弦太・板倉憲政 (2016). 親子間のソーシャルサポートの享受と大学生の独立性・抑うつとの関連 心理臨床学会第 35 回秋季大会 パシフィコ横浜. 2016 年 9 月 4 日 ~ 9 月 7 日

2) 板倉憲政・小出弦太 (2015). 親子間におけるソーシャルサポートの授受と心理的欲求との関連 心理臨床学会第 34 回秋季大会 神戸国際会議場・神戸国際展示場・神戸ポートピアホテル. 2015 年 9 月 20 日

3) 板倉憲政・小出弦太 (2015). 親子間におけるソーシャルサポートの授受が大学生の独立意識および抑うつに及ぼす影響 日本ブリーフセラピー協会第 7 回学術会議プログラム 同志社中学校・高等学校. 2015 年 9 月 5 日

〔図書〕(計 1 件)

1) 板倉憲政 (2016). 日本家族心理学編 家族心理学ハンドブック 家族研究法 5) 家族療法の事例研究 金子書房 印刷中.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

板倉 憲政 (Itakura Norimasa)

岐阜大学・教育学部・助教

研究者番号：20708383